



宇宙衛生博覧会

筒井康隆

新潮社

(10/15刊・¥750)

“衛生博”とは、病害の恐ろしさや、衛生の必要性などを知らせる展覧会のようなもの。もう今では行なわれていないから、実際どんな形式だったのかは知らない。しかし、生理的恐怖を感じさせる、おぞましい展示もあったのだろう。この作品集もまた“宇宙規模の生理的恐怖”を与えてくれるのだ。

頬に蟹の形をした瘤こぶのできる「蟹甲癬かにこうせん」、文字どおりの「顔面崩壊」、切り裂きジャックまがいの医者たち「問題外科」——そして、これらの恐怖が、筒井流ハードSFに結実した「ボルノ惑星のサルモネラ人間」。特に、巻末を飾るこの中編は、舞台の設定から、そこに潜む生態系の謎の解明まで、純SFの手法を用いながら、なお筒井調下タバタでもあるという、離れ業を成功させている。動植物の命名や、登場人物の学問的論争が、巧みな伏線となっているのも見逃せない。ほかでも、「最悪の接触ワーストコンタクト」や「関節話法」などは、異星人とのコミュニケーションを描いており、これもSFの伝統的テーマである（前者は、デューモン・ナイトの「異星人ステーション」と設定が同じ）。どれもが、中間小説誌に載ったとは思えない“SF”ばかりである。（俊）